

～ 現状と本音から垣間見られる「がんになっても安心して暮らせる社会」とは ～ 「がんサバイバー」向けアンケート調査報告

アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社、日本における代表者・社長:外池 徹)は、全国のがん経験者(がんサバイバー)を対象としたアンケート調査を実施し、集計結果をまとめました。(詳細は別紙をご参照ください)

【調査結果の概要】

1. 本音と悩みについて

<がん診断時の本音:「普段通りに」が約半数>

- 周りには「普段どおり」「今までどおり」に接してほしいという人が約半数(49%)、「そっとしておいてほしい・励まさないでほしい」が18%だった。反対に「励ましてほしい」は6%に留まった。
- 「悩みがある」と答えた人は87%で、悩みの内容は「不安・動揺など精神的なこと」が最も多く、次いで「治療方法」が多かった。

<がんの治療が終了した現在も「悩みがある」は44%>

- 「現在、がんに関連する悩みがある」と答えた人は44%だった。診断時と同じく「不安・動揺など精神的なこと」が最も多いが、診断時と比較すると「生きる意味」についての悩みが2位と上位に押しあがっている。
- 治療終了から5年以上・10年以上が経過していても、3割以上の方が悩みがあると回答している。「5年生存率」という定義的なひとつの節目があるものの、患者の不安や悩みは「時間が解決する」訳ではないと推測される。

2. 就労状況と職場環境について

<がん罹患後の就労状況:半数以上が「勤務先が変更」>

- 半数以上(53%)の人が勤務先が変わっており、「依願退職」が30%と最も多い一方で、「解雇」や「希望していない異動」が全体の17%にのぼった。
- 職場の制度・雰囲気や周囲の人が「がん患者に対して理解がある」と答えた人が約6割だった一方で、「どちらでもない」「理解がない」と回答した人が約4割おり、理解ある対応を受けていないと感じている人が多い現実が明らかになった。

<「言っても仕方がない」:職場に報告しなかった人が約3割>

- がん罹患について、職場に報告しなかった人は29%だった。主な理由として「言っても仕方がない」が52%と最も多く、「理解してもらえない」が16%だった。
- がん罹患について、職場で一番最初に報告・相談した相手は「直属の上司」が68%と最も多く、次いで「先輩社員・同僚」が16%となった。一方で、一番最初に報告した相手以外には誰にも話していないという人が37%にのぼった。

当社は、がん経験者が置かれた現状と本音とが浮き彫りになった本調査報告をより多くの方に知っていただくことで、がんになっても安心して暮らせる社会の実現に努めていきます。

「がんサバイバー」向け アンケート調査

=目次=

- 調査概要
- 回答者属性
- 単純集計・クロス集計
 - ・発覚経緯
 - ・周りとの関わり
 - ・悩み
 - ・就労／収入
 - ・職場
- <Appendix> 基本属性

調査概要

- 対象者：全国のがんサバイバー 男女
(がんサバイバー＝がん罹患経験があり、治療を完了している人)
 - サンプル数：362名
 - 調査方法：インターネット調査
 - 調査実施期間：2011年12月2日(金)～12月12日(月)
 - 割付条件：
 - ① 男女比 - 50 : 50
 - ② がん種 - 術後5年生存している方を「がんサバイバー」と定義した場合のがん種分布を再現：がん罹患率×5年生存率より試算
- 参考：「地域がん登録全国推計値」「全国がん罹患モニタリング集計 2000-2002年生存率報告」
(独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター， 2011)
- 実施機関：株式会社 キャンサーズキャン
 - 調査協力：キャンサー・ソリューションズ株式会社

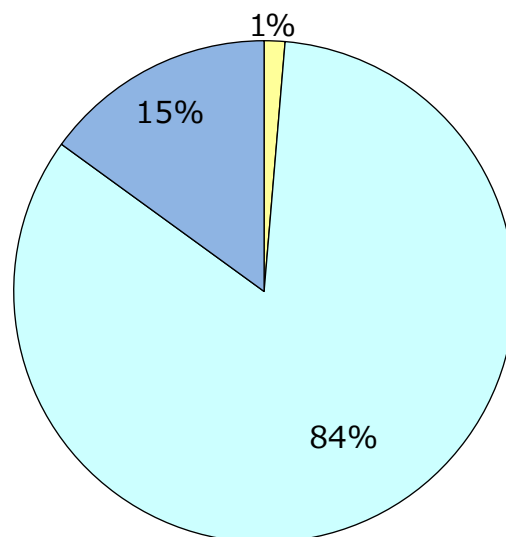
回答者属性 （「がん」について）

※基本属性については<Appendix>をご参照ください

属性

がん治療 完了の度合い

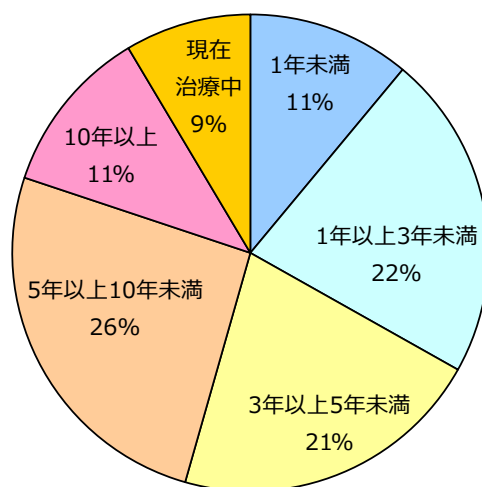
- 治療のため通院している
- 治療は完了しているが、定期的な検査のために通院している
- 治療が完了し、定期的な検査も行っていない



(N=362)

属性

治療終了後から現在までの期間

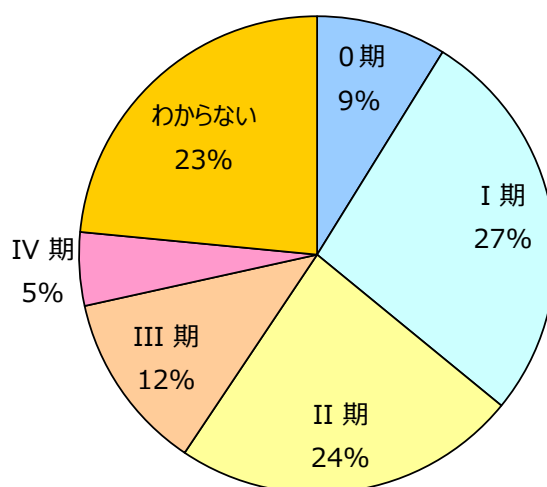


(N=362)

5

属性

診断された時のステージ(進行状態)

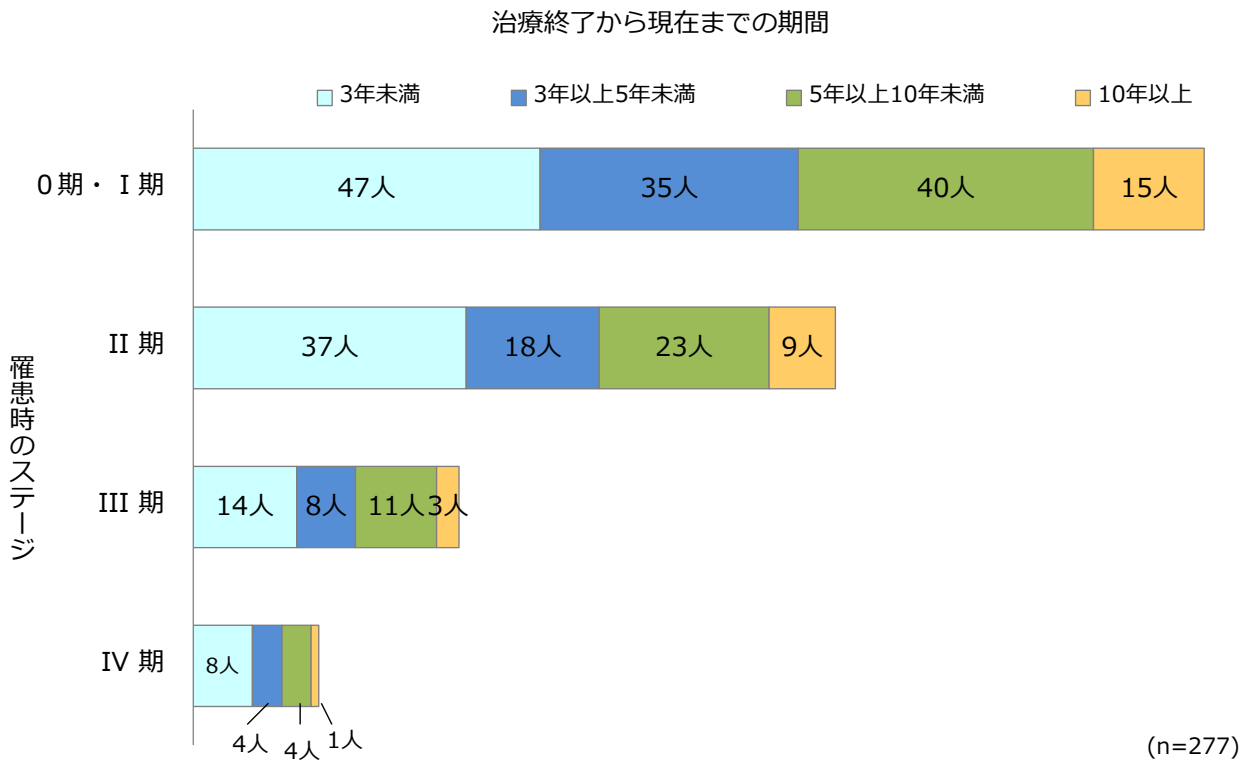


(N=362)

6

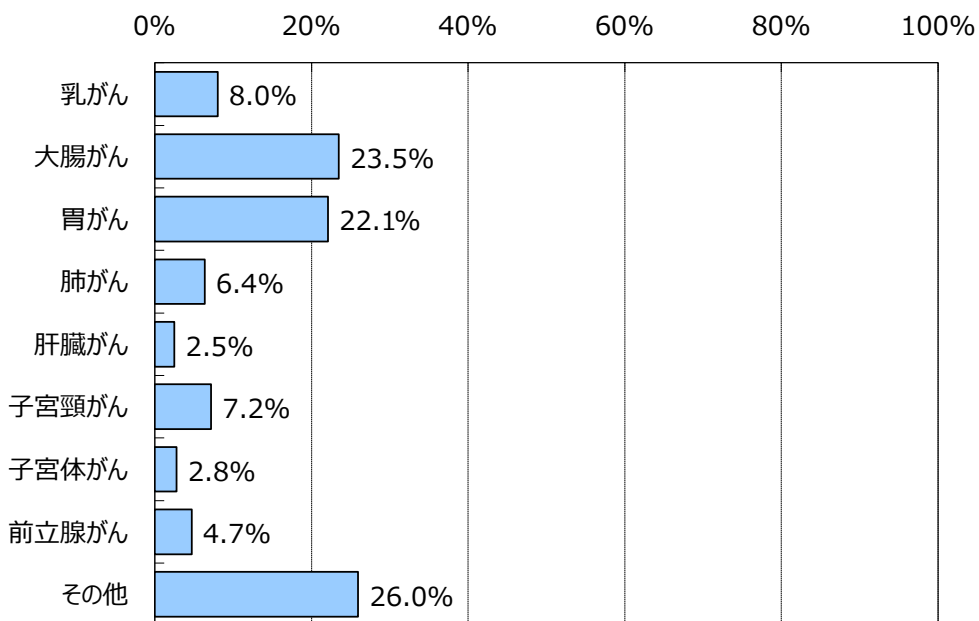
属性

診断された時のステージ(進行状態) × 治療終了から現在までの期間 【人数】



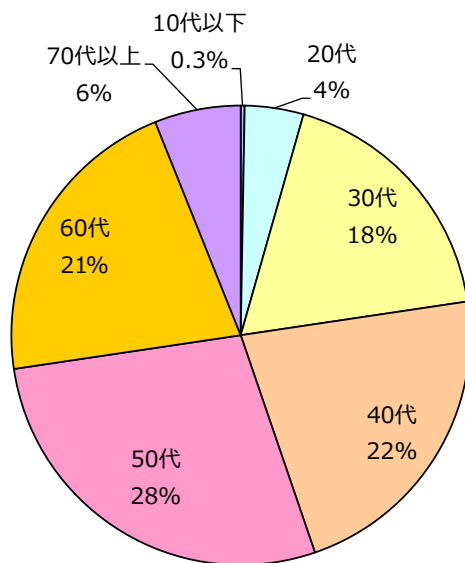
属性

罹患したがんの種類 (複数回答有)



属性

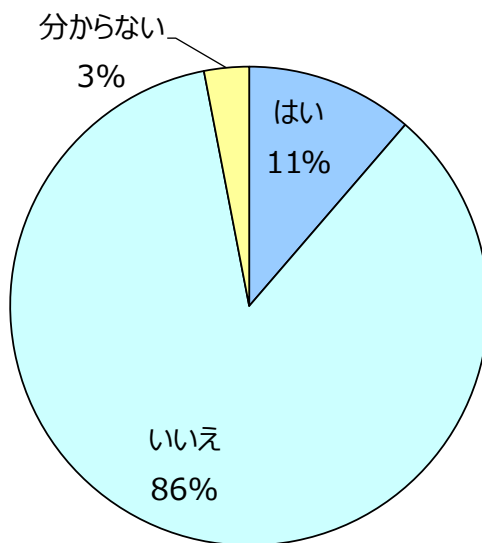
「がん」と診断された時の年齢



(N=362)

属性

再発・転移治療経験の有無

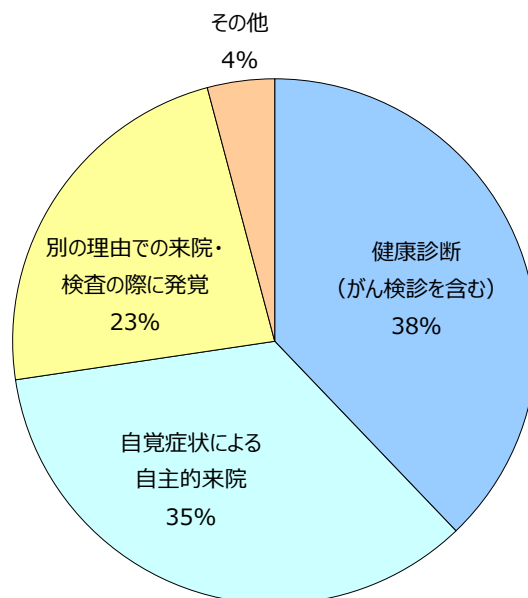


(N=362)

単純集計・クロス集計

発覚経緯

がんが発覚したきっかけ



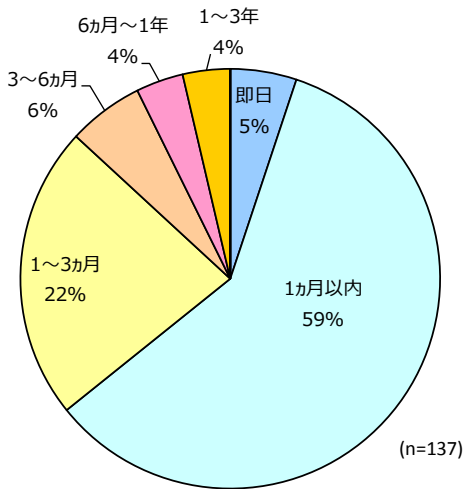
(N=362)

がんが発覚したきっかけは、「健康診断（がん検診を含む）」が最も多く、次いで「自覚症状による自主的来院」であった。

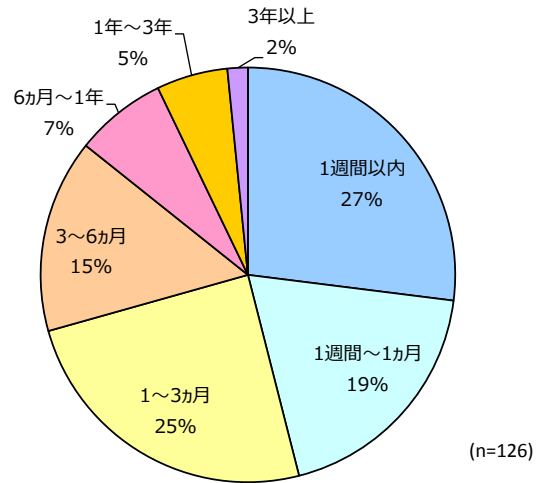
発覚経緯

がんが発覚してから受診までの期間

【健康診断で発覚のうち】
精密検査(2次検査)を受診するまでの期間



【自主的来院のうち】
自覚症状を感じてから
初めて来院し受診するまでの期間

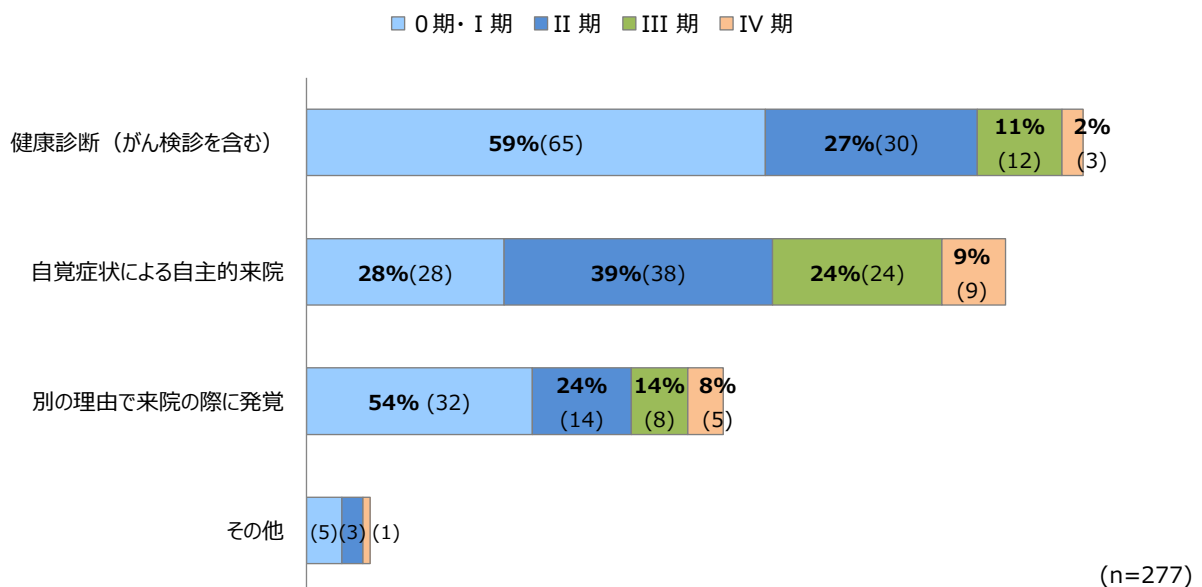


健診で異常が発覚してから精密検査を受診するまでに、1ヵ月以上かかっている人は36%もあり、自覚症状を感じてから受診するまでも1ヵ月以上かかっている人が54%もいた。がんが発覚することへの不安・恐れが精密検査受診を遅らせてしまっている可能性が見られる。

13

発覚経緯

「罹患時のがんのステージ」と「がん発覚の経緯」の関係

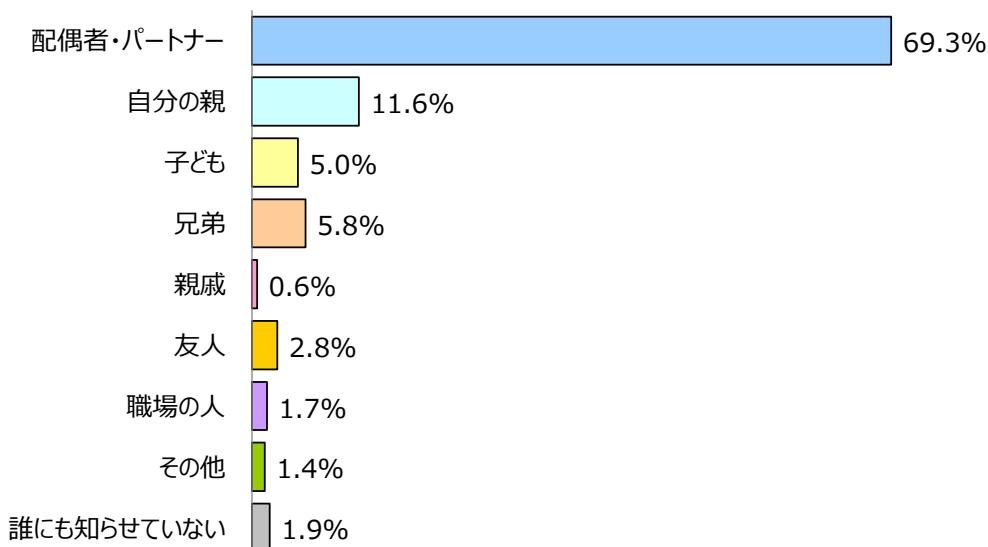


健診 (がん検診含む) を通じて「がん」が発覚している人は、早期のステージで発覚している場合が多いことが明らかとなった。改めて、健康診断を受けることは、がんを早期に発見できる可能性につながる事が確認でき、がん検診の重要性が確認できた。

14

周りとの
関わり

がん罹患について一番最初に相談・報告した相手



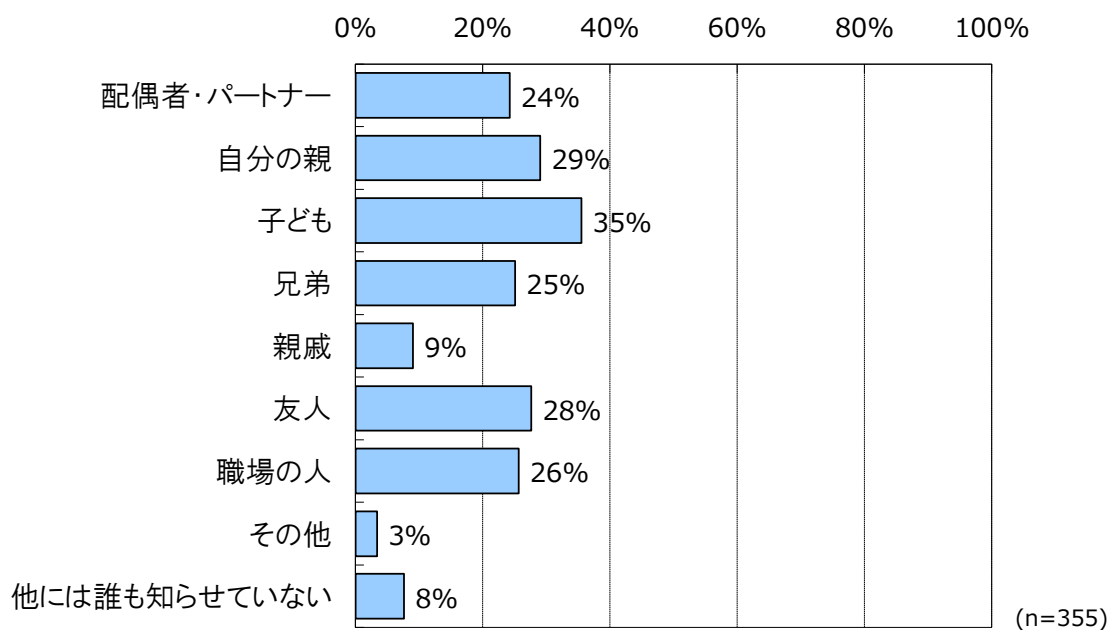
(N=362)

がん罹患後、患者が一番最初に罹患について報告・相談をした相手として最も多かったのは、配偶者/パートナーであり、自分の親が次いで多かった。

15

周りとの
関わり

一番最初に報告した相手以外で、がん罹患について報告した相手 (複数回答)

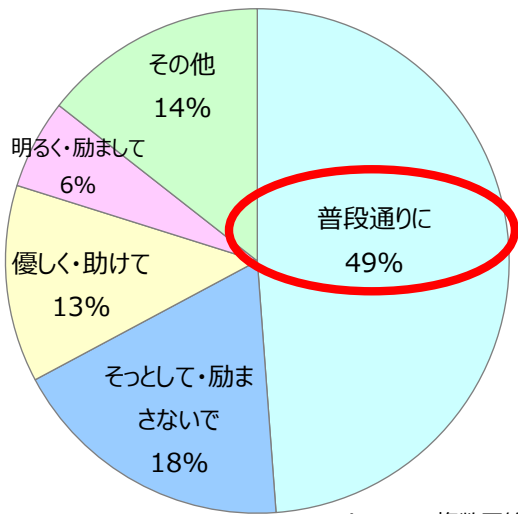


(n=355)

がん罹患について話した他の相手は、上記のとおりであった。

周りとの関わり

「がん」と診断されたとき、周りにどう接してもらいたかったか。(自由回答よりコーディング)



<自由回答より抜粋>

「変わりなく、いつもどおりに接してもらいたかった」

「これまで同様、何も変わらないでしてもらいたかった」

「病人扱いしないで、普段と変わりなく接してほしい」

「よくなってほしいという、思いが伝わるだけでよかった」

「あまり話題にしてもらいたくなかった」

「がんばってという言葉はつらかった」

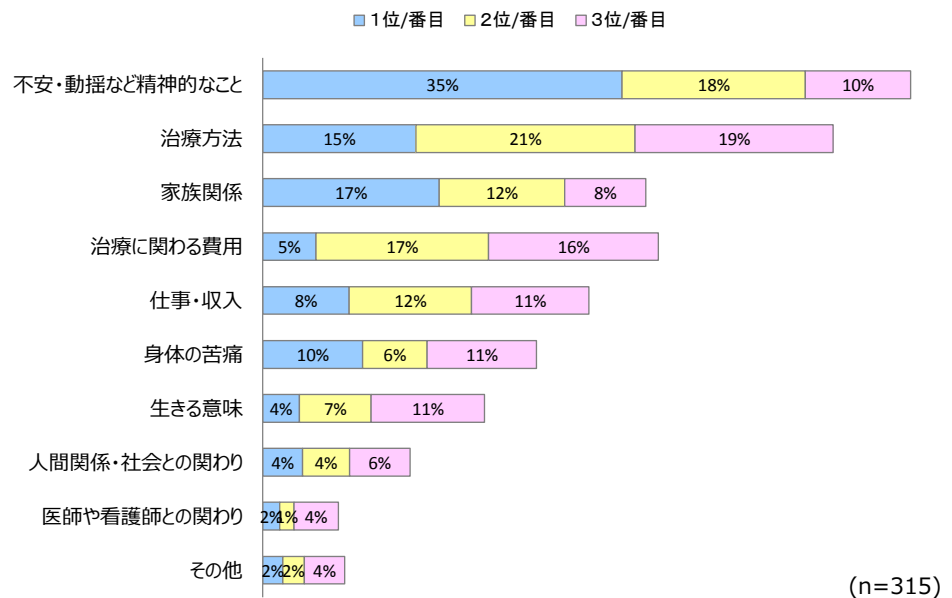
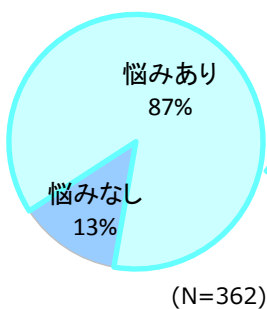
「知られたくないけど、慰めてほしいし、励ましてほしくて。でもいつもと変わらずが、一番よかった」

がん罹患時、患者の気持ちとしては、「普段通りに」「今までどおりに」接してほしい、という内容を挙げた人が約半数を占めた。その次に多いのが、「そっとしてほしい、励まさないでほしい」という内容で、「励ましてほしい」という内容は6%に留まった。周りの人ががんに罹患した時、「闘病をがんばってほしい」という気持ちがあっても、患者にそれを直接伝えるのは得策でないことがうかがえる。

17

悩み

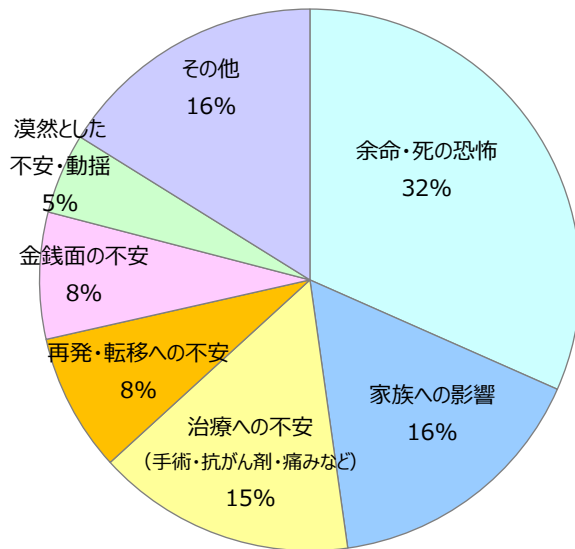
「がん」と診断された当時の悩み (TOP3)



がんと診断された当時、悩みがあったと答えた人は87% (注：治療終了から長時間経っていることから記憶が定かではないため「なし」という人もいた)。悩みの内容としては、「不安・動揺など精神的なこと」を挙げた人が1番多く、2番目には「治療方法」が多かった。

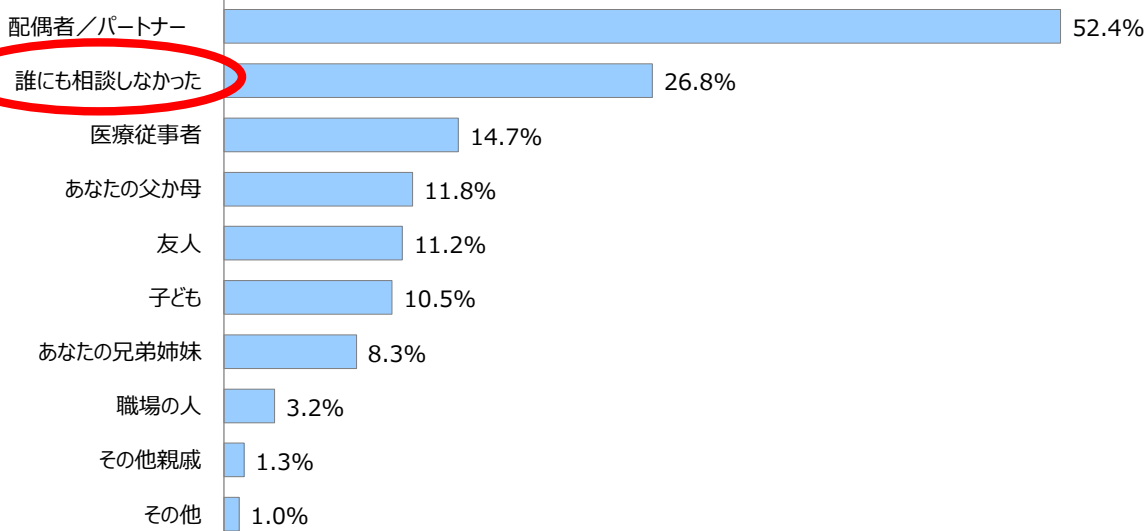
18

「不安・動揺など精神的なこと」



(n=198 複数回答)

罹患当時の悩みの1位「不安・動揺など精神的なこと」の内訳としては、「余命・死の恐怖」が一番多く挙げられた。「がん＝死」というイメージを持っている人が多数いることが見受けられる。続いて、家族に向けた心配、治療への不安が挙げられた。

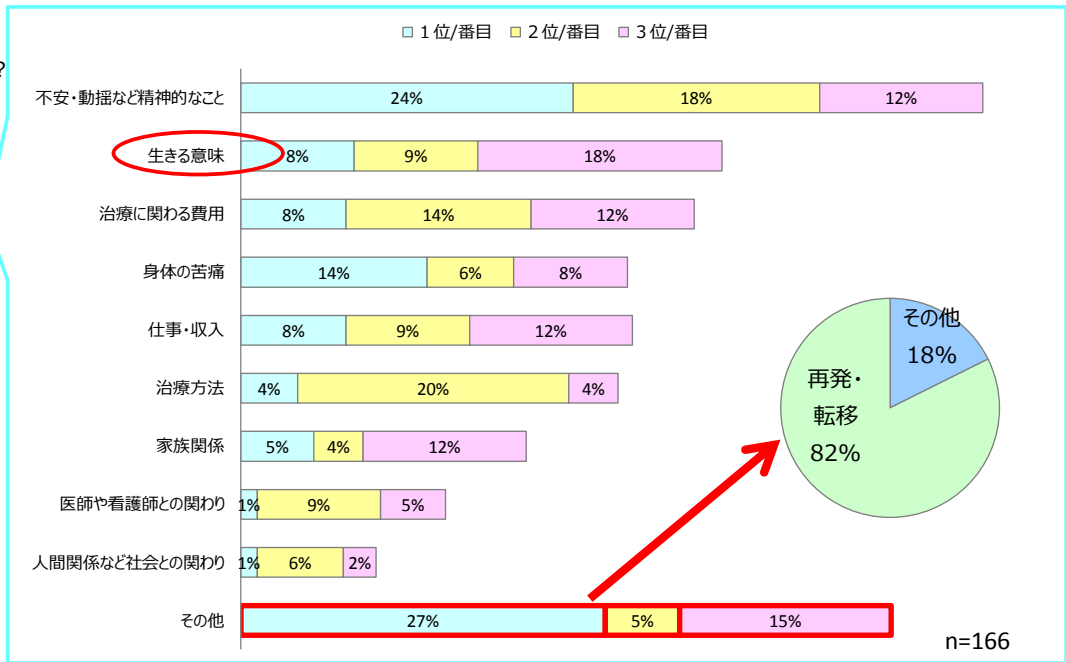
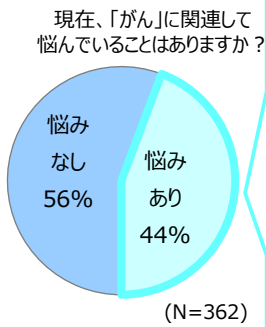


(n=313)

悩みを相談する相手は、配偶者/パートナーが最も多かったが、悩みを抱えながらも、「誰にも相談しなかった」という人が約30%もいた。不安を抱えながらも相談できない/相談できる相手がない、という人が多い実情が見られた。

悩み

現在の「がん」に関連する悩み (TOP 3)

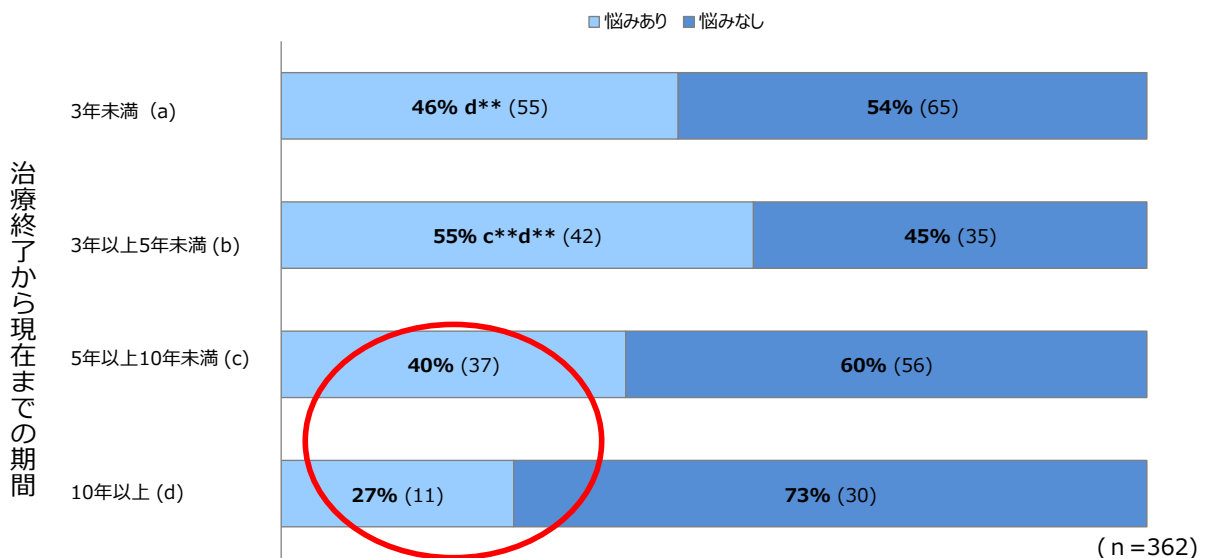


治療が終了しつつも、未だに「がん」に関連して悩んでいるサバイバーは多い。その内訳としては、「精神的なこと」と「その他」が多く挙げられた。自由回答集計の結果、「その他」の83%は「再発・転移」の不安に関する悩みであった。また、罹患当時と比較して「生きる意味」が上位に浮上しており、時間を経て「がん」に関する悩みが変化していることが分かった。

21

悩み

現在の「がん」に関連する悩みの有無 (治療終了から現在までの期間別)



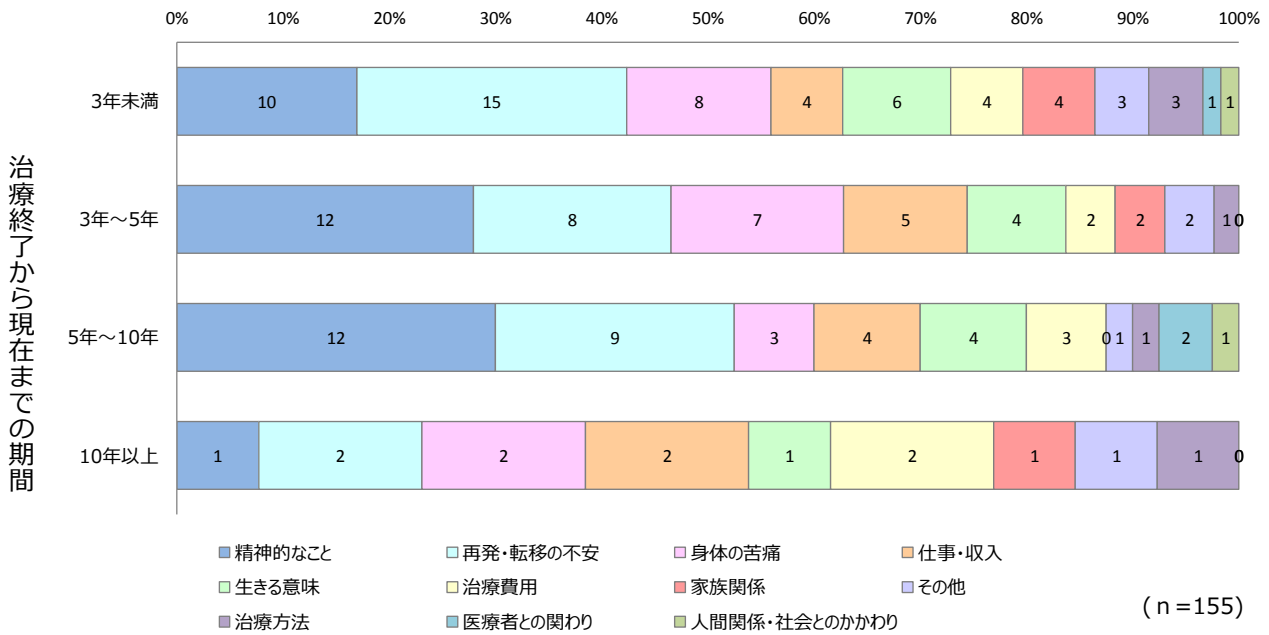
** = 0.05水準で優位

治療完了から5年以上・10年以上が経ったサバイバーも今なお30-40%の人が、現在「がん」に関連する悩みを抱えており、治療終了から相当の期間が経ったとしても「がん」罹患による不安や悩みは、なかなかなくなるという事実が浮き彫りになった。「5年生存率」という言葉もあるなか、定義的には5年間でひとつの節目であっても、患者の心の中の不安は「時間が解決」という訳にはいかないようである。

22

悩み

現在の「がん」に関連する悩みの内容（治療終了から現在までの期間別）

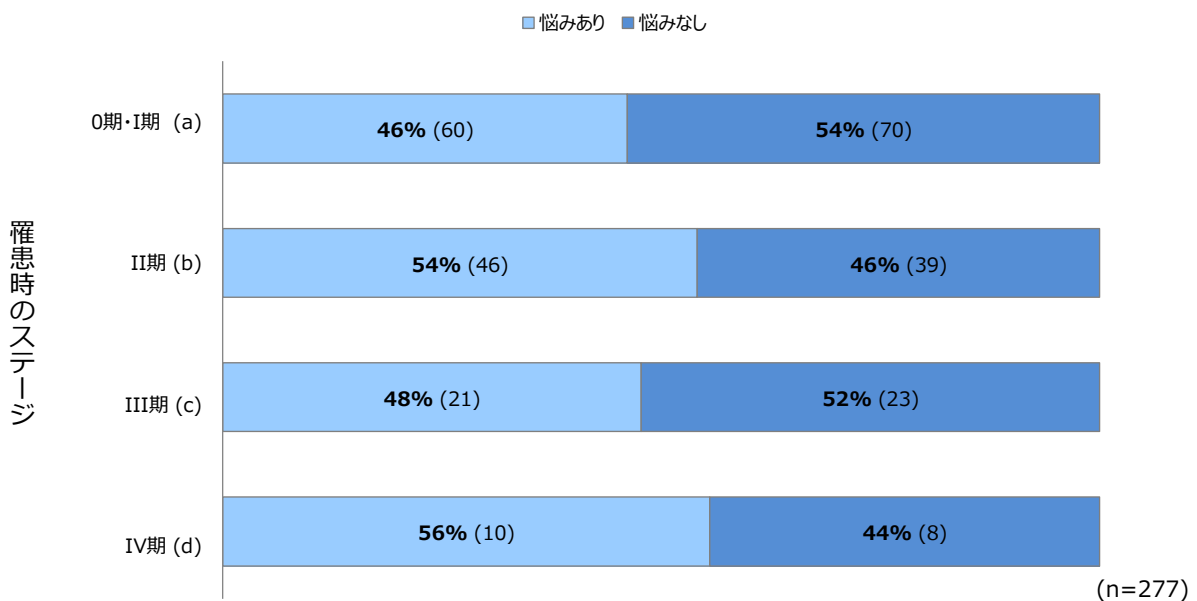


治療終了時からの期間別に、悩みの内容を比較すると上記のとおりとなった。再発・転移への不安などは年々少しずつ減少しつつも、あらゆる面において、“時間経過→悩みの減少”という訳にはいかない事実が見られる。

23

悩み

現在の「がん」に関連する悩みの有無（罹患時のステージ別）



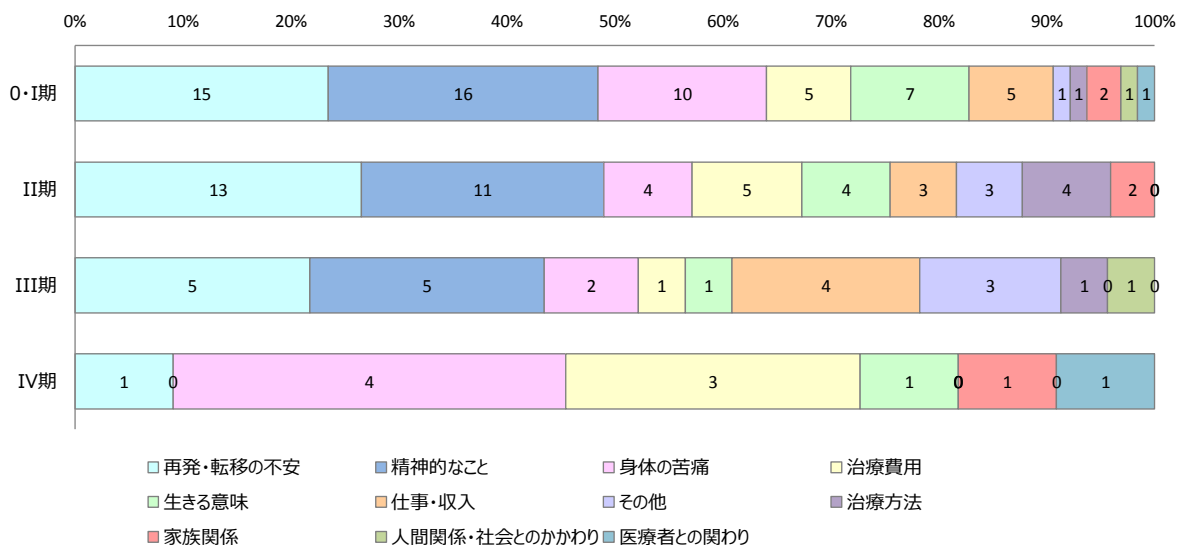
罹患時のステージが進行しているほど、現在も悩みを持っている人は多くいたが、どのステージで見つかったとしても約半数の人が現在も「がん」に関連する悩みを抱えていた。たとえ早期の発見だったとしても「がん」という事実はその患者本人にとっては重く、「がん」という疾患が各人に与える精神的な負担が改めて明らかになった。

24

悩み

現在の「がん」に関連する悩みの内容（罹患時のステージ別）

罹患時のステージ



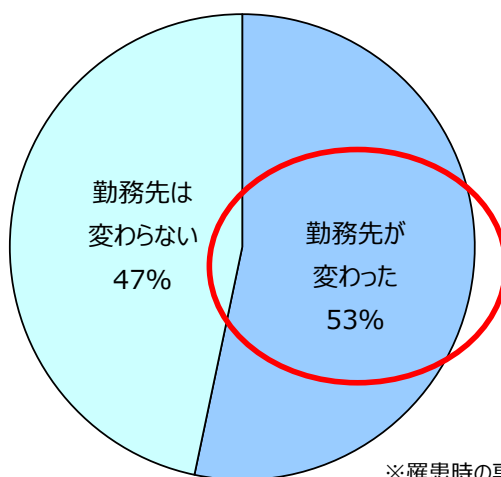
(n=147)

罹患時のステージ別に悩みの内容を比較すると上記のとおりとなった。主だった傾向は見受けられず、前述同様、どのステージで発覚しても「がん」という病気が及ぼす悩みの影響が各患者にとってはあらゆる意味で精神的な負担になることがうかがえる。

25

就労/ 収入

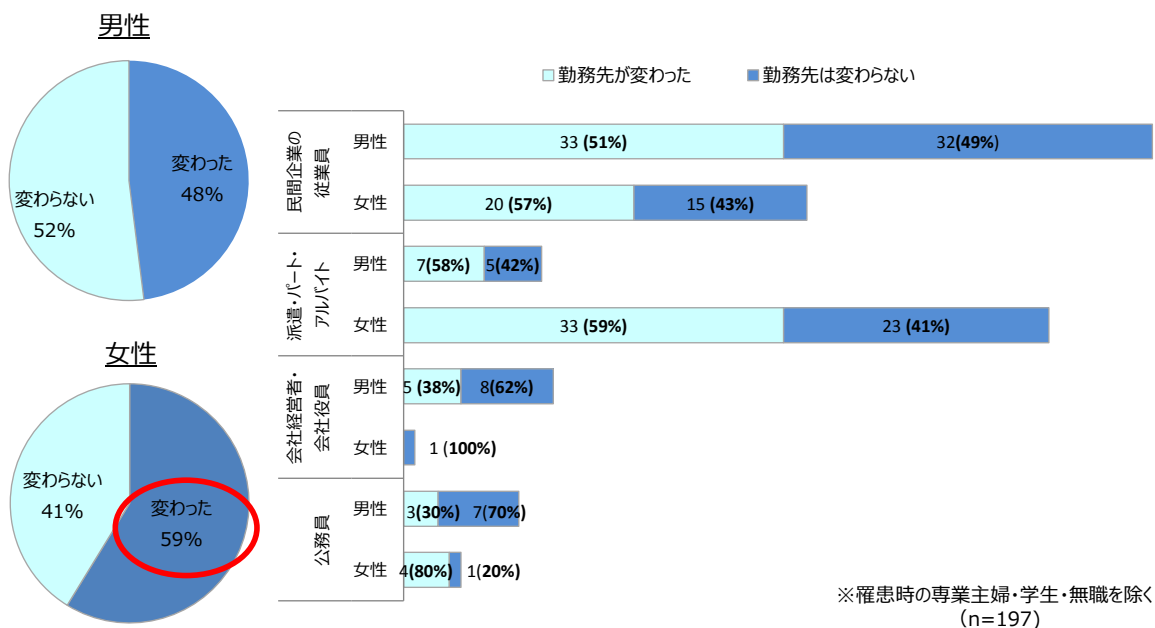
がん罹患後の勤務先の変化



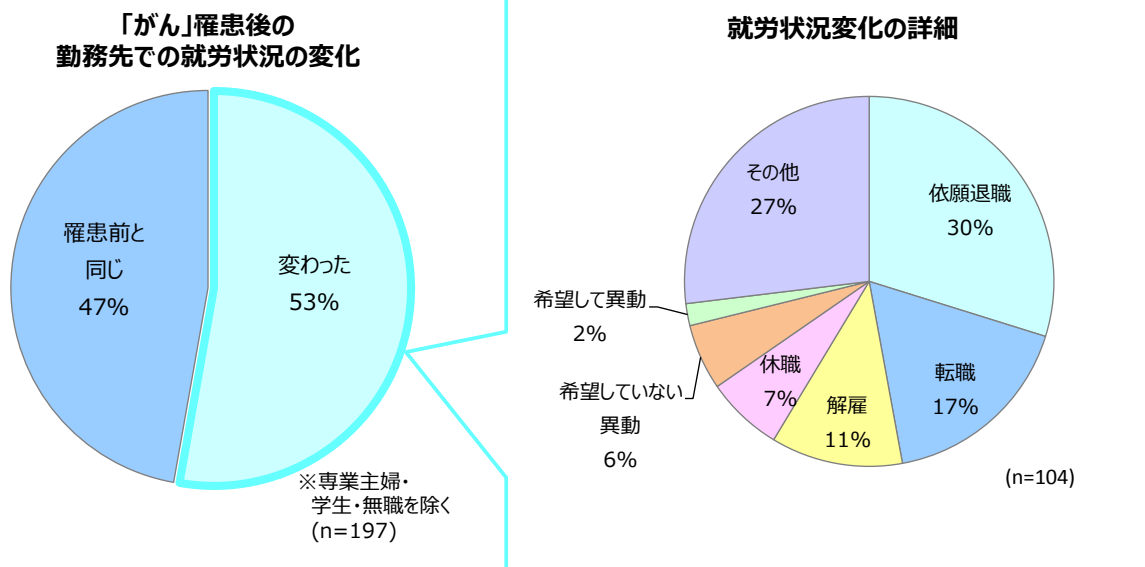
※罹患時の専業主婦・学生・無職を除く
(n=197)

がん罹患した後、勤務先が変わったという人は半数以上いた。

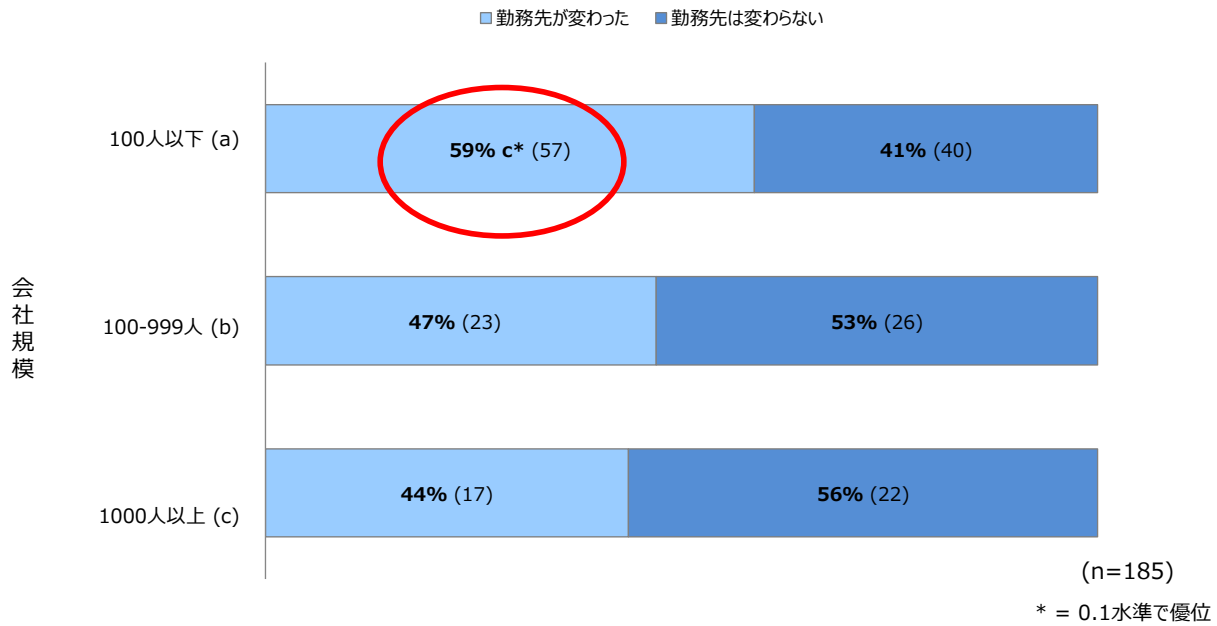
26



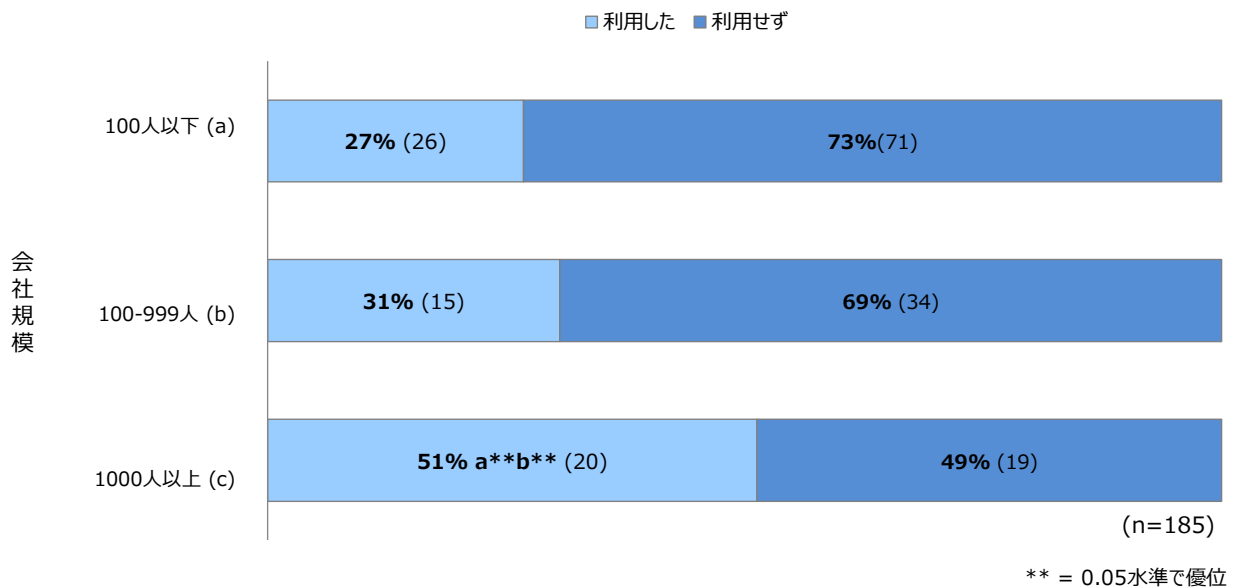
勤務先が変わったのは、女性の方が多く、また、正社員と比べて「派遣・パート・アルバイト」が多く見られた。



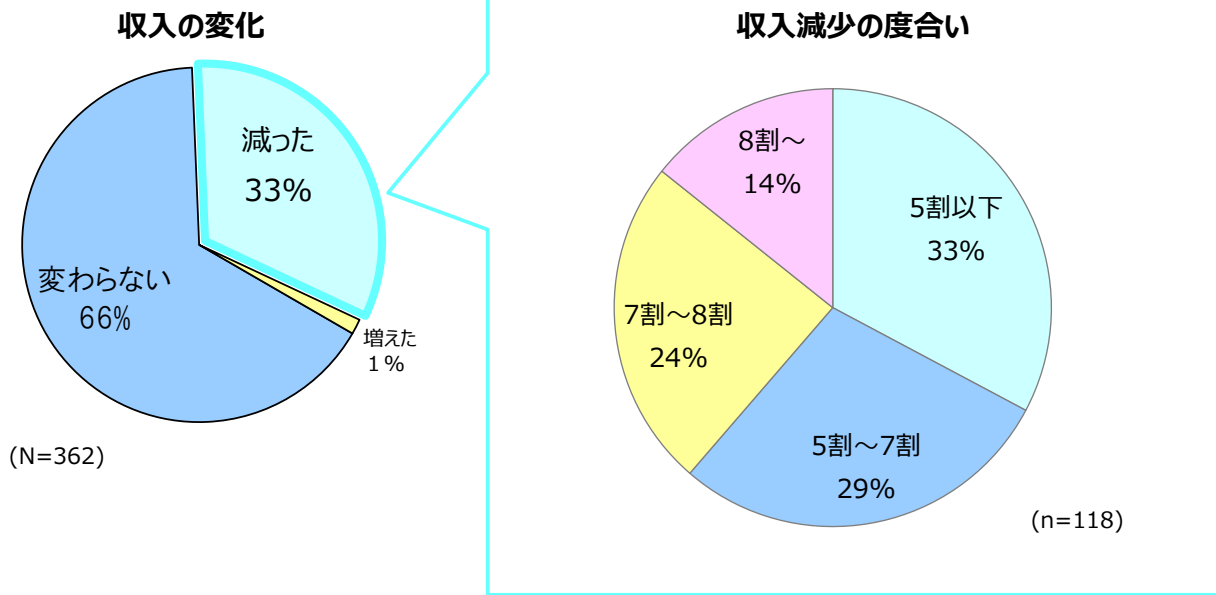
がんと診断されたあと、就労状況が変わった人も半数以上多く見られた。その詳細としては「依願退職」が30%と最も多く、「解雇」や「希望していない異動」も合計で17%も見られた。



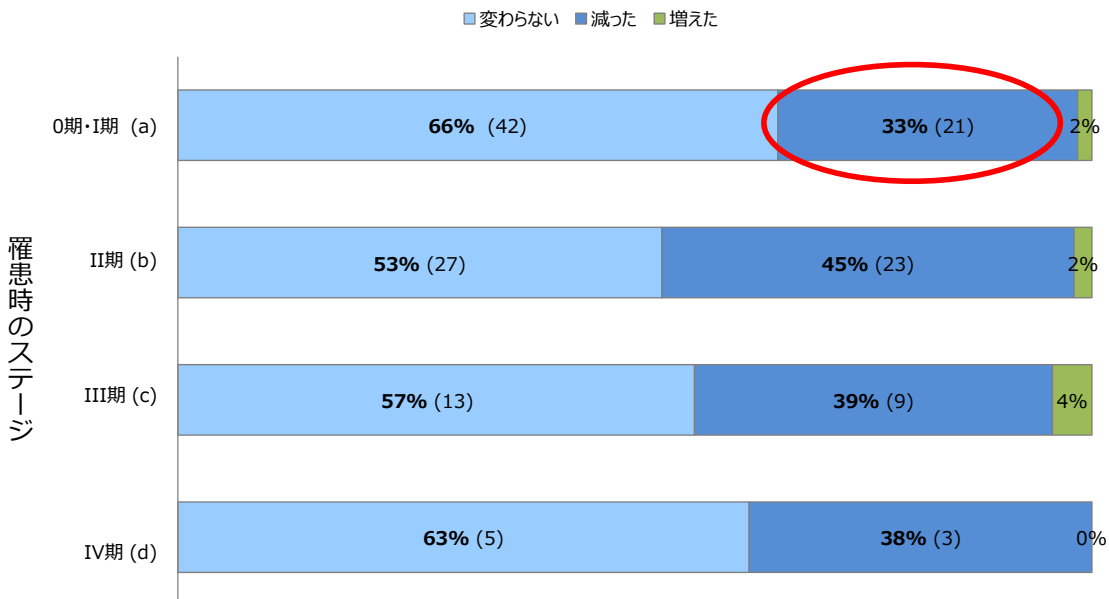
「がん」罹患の前後で勤務先が変わったかどうかの割合は、企業規模との相関が見られた。傾向として1000人以上の社員を持つ比較的大きな企業に勤めていた人は44%なのに対し、100人以下の職場に勤めていた人は、約60%が勤め先が変わっていた。



がん罹患前に勤めていた会社規模が大きいほど、有給休暇以外での会社制度を利用して高い割合が見られた。規模の大きな会社ほど、制度自体が存在している/取りやすい環境がある、という状況の表れといえるのかもしれない。



「がん」罹患の前と後で、収入が減った人は約3割もいた。そのうち、罹患前と比較して7割以下に減ってしまった人は約60%にも上り、うち5割以下に減ってしまった人が33%となった。この収入減少とともに治療費等の支出が増える事実は、がん患者にとって重要な問題と言えるであろう。

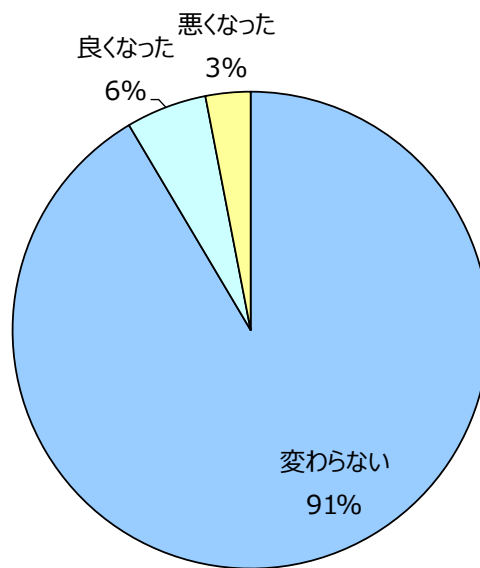


※罹患時専業主婦・学生・無職を除く (n=146)

罹患時のステージに関わらず、「がん罹患後に収入が減った」と答えた人は約30-40%もいた。特に注目すべきは0期・I期で発覚した人である。生存率も高く、仕事に支障が無い状態に比較的早く戻れる患者も多いはずだが、「がん罹患した」という事実で不利益を被っている点は問題視すべきである。

職場

がん罹患について報告後の職場での人間関係の変化



(n=164)

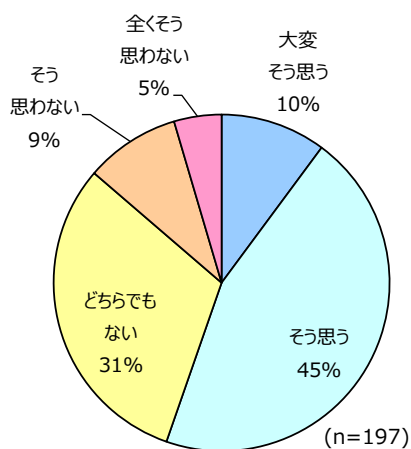
がん罹患によって、職場での人間関係が変わった、という人はあまり見られなかった。

33

職場

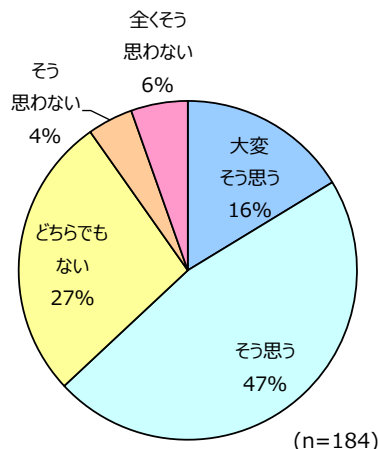
「がん患者に対して理解がある」と思うかどうか

職場の制度や雰囲気



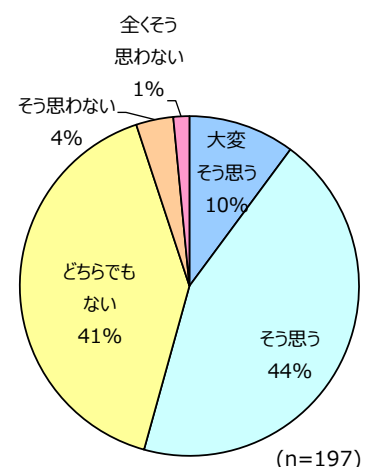
(n=197)

上司



(n=184)

同僚



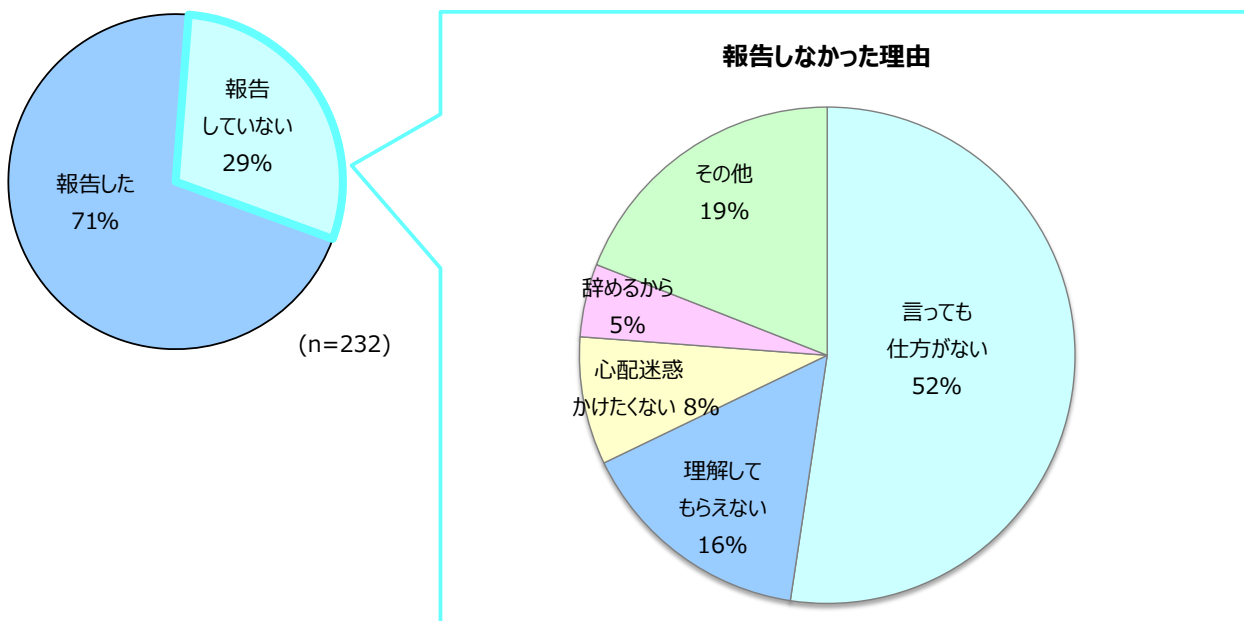
(n=197)

職場の制度や雰囲気や人間が「がん患者に対して理解がある」と答えた人は約50-60%いた。ただし、「どちらでもない」「理解がない」と答える人が約40-50%おり、理解ある対応を受けていないと感じている人が多い現実も明らかになった。

34

職場

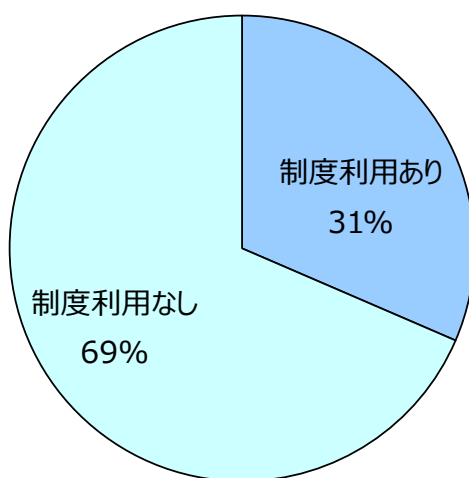
がん罹患についての職場への報告の有無（理由：自由回答よりコーディング）



がん罹患について、職場に報告をしなかった人は約3割もいた。その主な理由としては「言っても仕方がない」が半数以上、次いで「理解してもらえない(16%)」という答えが多かった。がん患者に理解のある職場が増えているものの、最初から諦めてしまう患者が多数いる可能性が浮き彫りになった。

職場

有給休暇以外の会社制度利用の有無

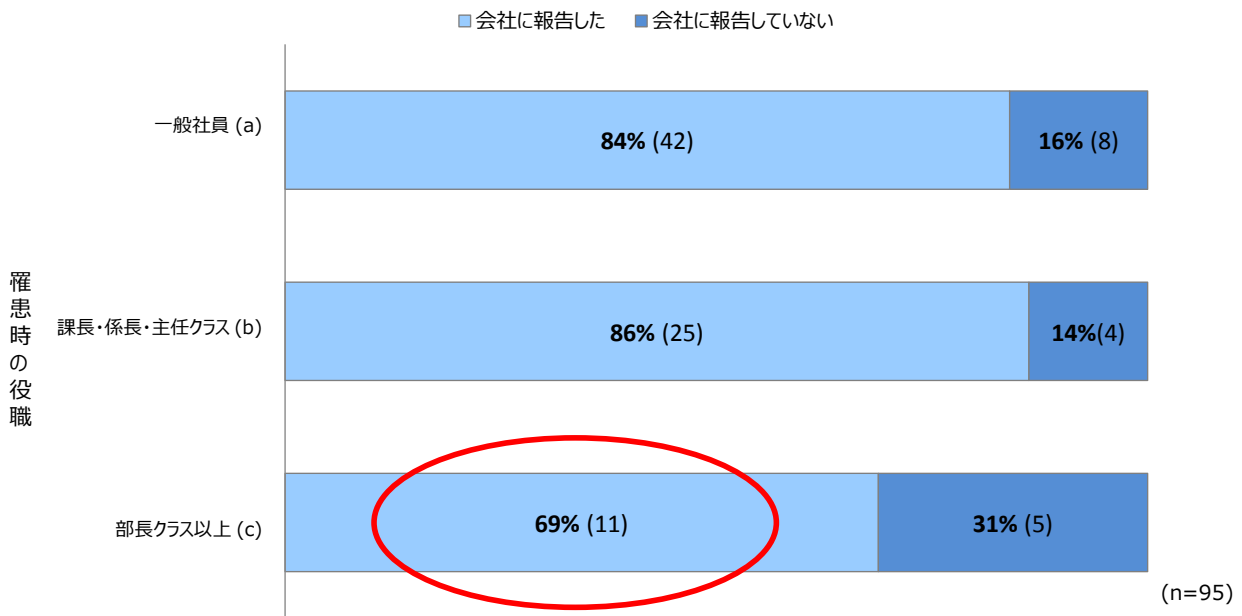


※罹患時専業主婦・学生・無職を除く (n=197)

「がん」罹患後、治療を行うにあたり有給休暇の利用以外に職場の制度（時短・治療休暇、傷病手当など）を利用した人は、31%に留まった。利用した人の具体的な制度としては「特別有給休暇」「治療休暇」「傷病手当」など（自由回答より）。

職場

正社員：「罹患時の役職」と「がん罹患についての会社に報告の有無」の関係

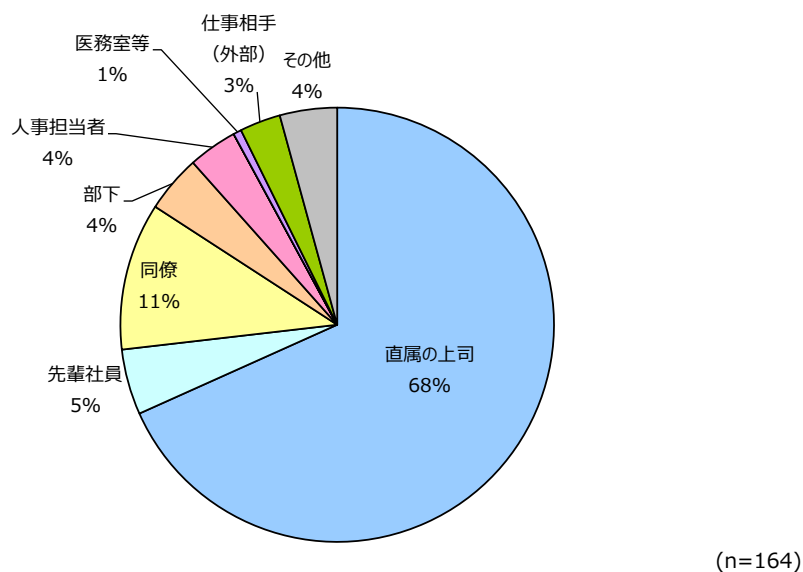


がん罹患時点での役職が部長クラス以上（部長クラス、役員クラス）になると、がん罹患に関して会社に報告していない人が比較的多いことが明らかになった。

37

職場

職場内で一番最初に報告・相談した相手

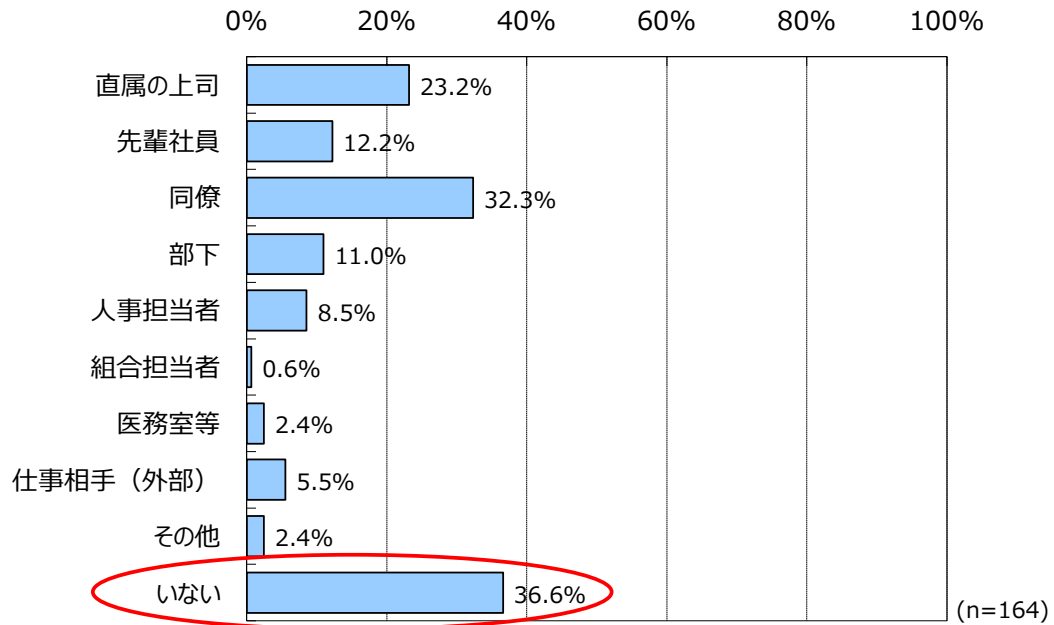


職場でがん罹患について、一番最初に報告・相談した相手は、「直属の上司」が最も多かった。次いで、「先輩社員・同僚」であった。仕事への影響を考慮してまずは上司に話す人が多いが、身近で信用できる相手にまず相談する、という人も多いようである。

38

職場

職場内で、がん罹患について報告したその他（一番最初の報告以外）の相手（複数回答）



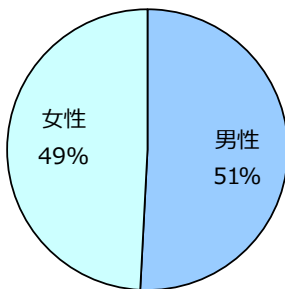
他にがん罹患について職場内で直接話した相手は、上記のとおりであった。一番最初に報告した相手以外には誰にも話していない、という人が4割近くいた。前頁の結果と併せ、直属の上司をはじめとする、身近にいる周りの人々の理解の重要性がうかがえる。

<Appendix>

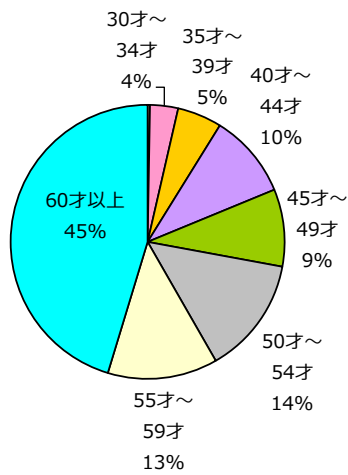
基本属性

性別・年齢・地域

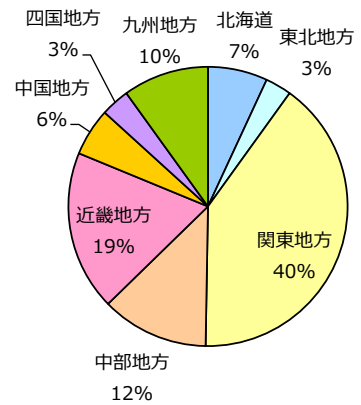
性別



年齢



地域

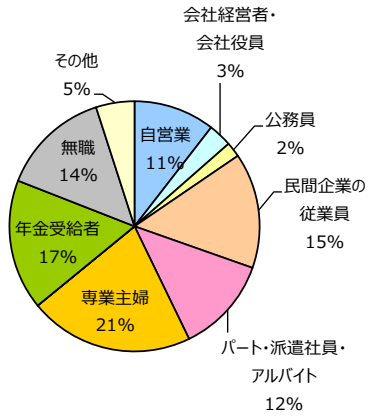


(N=362)

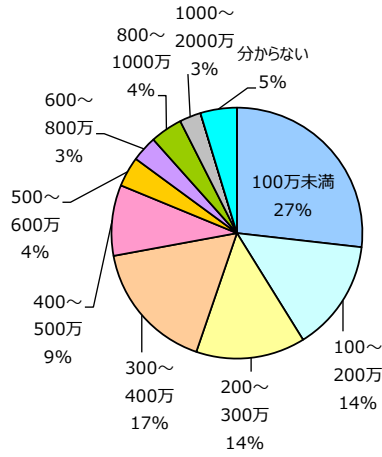
基本属性

現在の職業・年収・家族の世帯年収

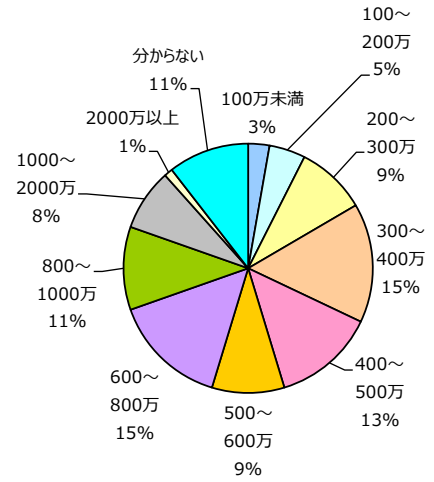
職業



年収



世帯年収

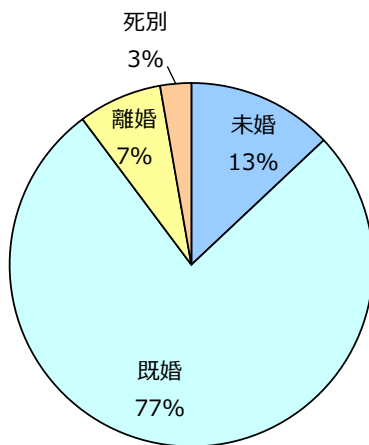


(N=362)

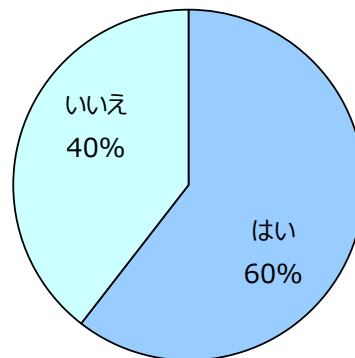
基本属性

婚姻状況・世帯主かどうか

婚姻状況

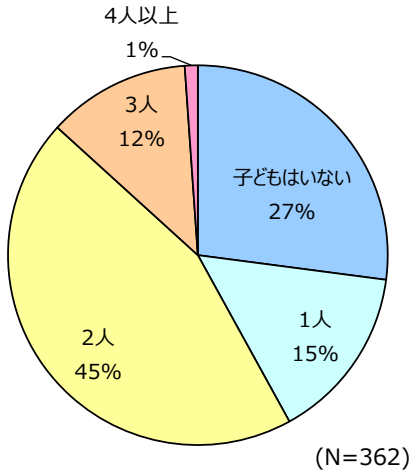


世帯主か

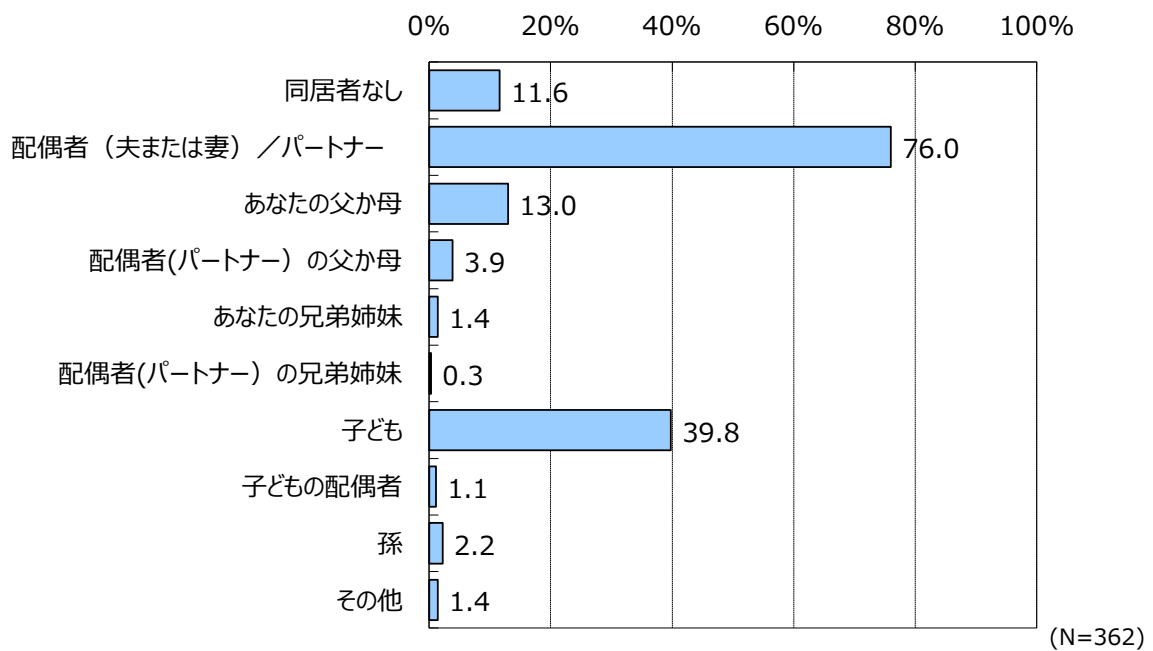
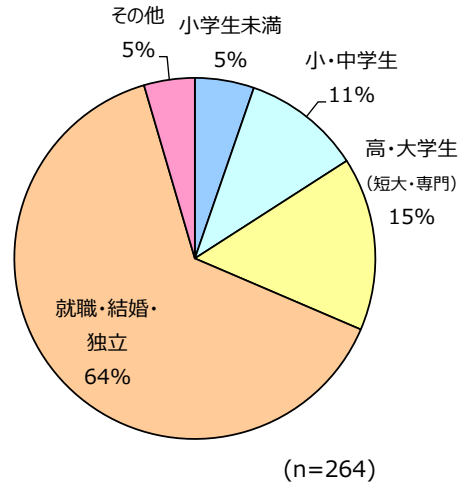


(N=362)

子どもの有無

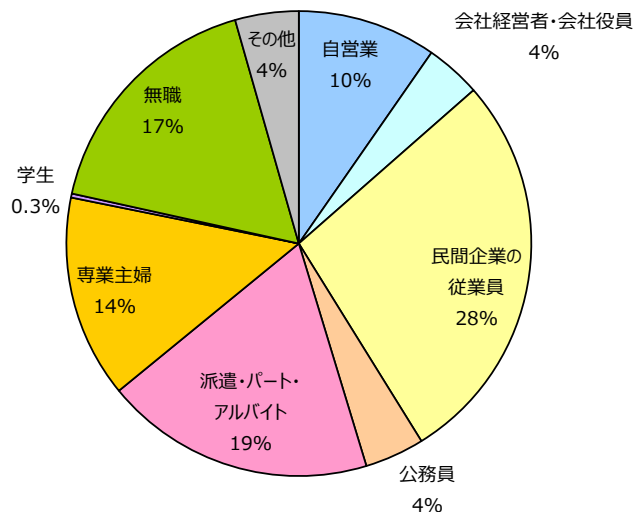


子どもの年齢



属性

がんと診断された当時の職業



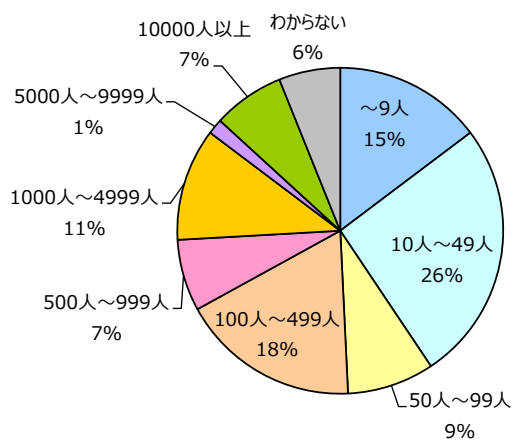
(N=362)

47

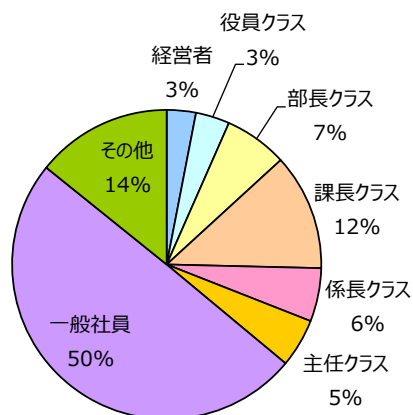
属性

がんと診断された当時の勤務先の規模・自身の役職

勤務先の従業員数



自身の役職

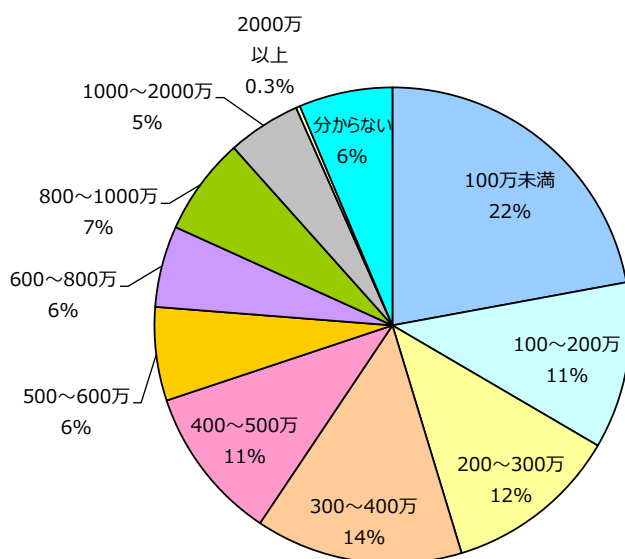


(n=197)

48

属性

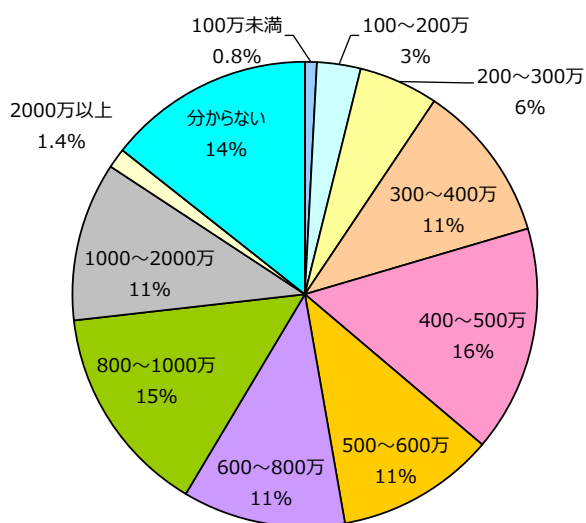
がん罹患前の自身の年収



(N=362)

属性

がん罹患前の家族の世帯年収



(N=362)